

<<口頭発表>> (9月13日 10:00-10:30)

【F棟 2F 209 教室】

非デスマス体の指標的意味

岡崎 渉

デスマス体、非デスマス体は一般的に丁寧さやフォーマリティにかかわる意味をもつポライトネスのマーカールとして見なされている。だが、「指標性 (indexicality)」の概念を用いた先行研究により、デスマス体、非デスマス体は文脈によってさまざまな異なる意味(指標的意味)を帯びるものであることが示されている。非デスマス体の場合、同じ言語形式であってもインフォーマルの意味を表す場合と、フォーマリティにかかわる意味自体を表さない場合がある。本研究では、デスマス体を基調とした雑談における非デスマス体使用が、どのような文脈的特徴によりインフォーマルを表さないスピーチスタイルとして理解されるのか、また、それにより会話者間で何が行われているのかを調査した。その結果を踏まえ本発表では、Ochsの「指標モデル」を援用し、非デスマス体が帯びる指標的意味の説明を試みる。

<<口頭発表>> (9月13日 10:35-11:05)

【F棟 2F 209 教室】

外資系企業における日本人従業員のコードスイッチング

—モノレクタルな視点から—

齋藤純子

本稿は、談話分析の手法を用い、外資系企業に勤める日本人従業員のコードスイッチング (CS) をモノレクタルな視点から検討する。モノレクタルな視点とは CS 自体を1つの言語とみなす見方である。本研究では、日本人のみが参加する会議を分析対象とし、特に、彼らの CS が果たす機能に焦点を当てる。

分析の結果、会議における日本人従業員の CS は(1)自分の主張や話のポイントを強調する、(2)他人の発話を伝えるというバフチン(1981)の二声性(double-voicing)に関連した機能を果たすことが示された。

このような結果から本稿は、特定の「実践の共同体」において使用される CS は相互行為の目的を達成するための言語レパトリーの1つであり、文脈に応じて様々な機能を果たすことを示す。また、モノレクタルな視点は完全なバイリンガルではない話者の CS を理解するのに有効であることも示唆する。

<<口頭発表>> (9月13日 11:10-11:40)

【F棟 2F 209 教室】

熊本市内方言におけるアスペクト表現のコードスイッチングとその要因

吉里さち子

九州などの地方都市では、標準語と方言が混在する「地域共通語」が使用されているが、外国人等の地域外からその地方へ移動してきた人がスムーズにその「地域共通語」の担い手となるために、その詳細についての情報を提供することは必要であると考えます。

そこで、本研究では熊本県熊本市を対象とし、方言話者が自然談話の中で用いるアスペクト表現ヨル、トルと、標準語のテイルにおけるコードスイッチング（以下CSとする）の実態及び要因を明らかにすることを目的とした。

形式的側面から活用形、意味的側面からの先行する本動詞をそれぞれ要因と仮定した上で量的な分析を行い、松井(2009)らの「～ている」の意味用法の分類を援用し、アスペクト的意味のCSの要因としての可能性を検証した。

その結果、活用形及び先行する本動詞についてはCSの要因となる傾向はほとんど見られなかったが、アスペクト的意味はCSの要因となる可能性が示唆される結果となった。

<<口頭発表>> (9月13日 10:00-10:30)

【F棟 2F 210 教室】

内在化された日本軍の規律とキリスト教

—台湾原住民族の日本語の語りから—

荻原まき

台湾原住民族、特に高砂族は、日本軍と共に戦った経験を持つ。また原住民族はキリスト教徒が多いという背景も持つ。上記の背景をもとに、本研究では彼らの語りから、当時の日本軍とキリスト教がどのように彼らに内在し、「今ここ」と繋がっているかを分析することを目的とする。データとして台湾原住民族の C の語りを使用する。C は高砂族として日本軍と共に戦った経験を持つ原住民であり、キリスト教にも入信している。結果として、「規律」と同一視されるものとして「キリスト教」があったのではないかと考えられ、「日本の軍隊の精神」＝「国家神道」＝「キリスト教」が連続体となっており、それが「今ここ」の C を作り上げているといえるのではないかと考えられる。つまり、C の人生の全てが、「今ここ」でのキリスト教の信仰を基軸として解釈され、日本降伏以前の軍の規律とキリスト教の教えとの同一性が前景化されているのではないかとと思われる。

<<口頭発表>> (9月13日 10:35-11:05)

【F棟 2F 210 教室】

話の展開のやり方をターゲットとした「からかい」の分析

初鹿野阿れ 岩田夏穂

本発表は、3人の雑談に観察される「からかい」、特に会話の展開の仕方そのものに何らかの逸脱があり、それが対象になっているからかいの連鎖構造を分析する。事例では話し手が面白い話として話し始めた話が、自分で先に笑ってしまい、またオチ自体も面白くなかったため、からかわれている。聞き手の一人がほとんど反応なしにその話を聞いており、オチの直後に語り手をからかっている。分析の結果、からかいの対象となった逸脱は、面白い話として聞き手が期待した通りに展開しなかった、物語りのやり方における逸脱であると考えられる。それを指摘することを通してからかいが達成されていた。また、からかいの現れた位置は、聞き手が面白い話の中で適切な反応ができなかったことについての釈明や説明が来てもよい位置である。つまり、からかいは適切な行為ができなかったことの釈明として理解されるように組み立てられているようにも見えることが分かった。

<<口頭発表>> (9月13日 11:10-11:40)

【F棟 2F 210 教室】

子どもの介入によるインタビュー中断とその回復にみる
コミュニケーション資源の活用について
秦かおり

本研究は、ナラティブ・インタビューの場におけるインターアクションの最中に、子どもの話しかけによる強制的な中断が入り、その後インタビューを再開した時に起こる会話回復のために、参加者がどのような行為を行っているかを分析したものである。分析の結果、言語的な要素（「えーと、何話してたんでしたっけ」「それで」など）の前に、多くの場合は子どもが参入して行われた一連の挿入部分に関して別の **small stories** を挟んで評価部と終結部を作り、その後どちらが再開のターンをとるべきかを探りあう時間があることがわかった。これらは多くの言語的・非言語的資源を用いて行われており、一見すると中断の後には単に中断前の続きが再開されているだけに見える部分でも、参加者は多くのマルチモーダルな要素を用いてコミュニケーションを遂行していることを意味する。発表では実際のデータを用いてこれらの複合的な要素の効果について説明したい。

<<口頭発表>> (9月13日 10:00-10:30)

【F棟 1F 109 教室】

視覚情報の有無から見る沈黙解釈の差異
—同一作成者のトランスクリプトの比較を通して—
種市瑛

本研究は、会話中に生じる沈黙の解釈の枠組みを提示する基礎研究として、同一会話データに視覚情報の有無を持たせ、書き起こしを行った場合に、沈黙の書き起こしにどのような共通点、および相違点が見られるのか、またなぜそのように表記されたのかについて分析、考察を行った。同一研究協力者が音声データ、および動画データから作成した二種類のトランスクリプトを比較した結果、同一の沈黙に対し、(1) 記述の有無、(2) 表記された長さ、(3) 記された位置に違いが見られた。発表では具体例をあげながら説明を加え、会話中に生じた沈黙がどのように解釈されたのかについて考察を行なう。

<<口頭発表>> (9月13日 10:35-11:05)

【F棟 1F 109 教室】

発話解釈に伴う推測と視線認知

梅木俊輔

本研究は対話上の感動詞を伴う断片的発話に対し、解釈者の視線認知が他者の心的状態・行動の推測にいかに関与するかを心理言語学的実験手法によって考察する。断片的発話に関し、映像上の人物が視聴者に視線を向けて発話している動画と音声上同一であるが視線を向けずに発話している動画との間で視聴者の推測は一樣とならず、視覚的情報が聴覚的情報より強く推測に関与するタイプの発話と視覚的情報があまり関与しないタイプの発話が見られた。解釈者が導く推測は、解釈者が見積もる発話者の意図明示性の高低が間接的に関与し、発話に伴う視線の相違により、意図明示性が高く見積もれる発話ほど解釈の所要時間が短縮され、推測を導く所要時間に短縮が生じるものと考えられる。ただし、中には視線の相違にかかわらず、一樣に短時間で解釈されるタイプの発話もあり、推測以前の段階で発話の意図明示性の高低を見積もるプロセスを経ないことが示唆される。

<<口頭発表>> (9月13日 11:10-11:40)

【F棟 1F 109 教室】

視線の振る舞いと対照的な行為タイプの関係性

—同意・非同意ターンに着目して—

杉浦秀行

本研究では、会話分析の手法を用いて、評価連鎖における同意、非同意という対照的な行為と視線の振る舞いに着目し、対照的な行為が構成される中で、視線の振る舞いがどのように組織されているのかについて明らかにすることを試みた。その結果、同意のケースでは、評価連鎖における第二評価者（同意産出者）は、典型的に、第一評価ターンの開始部から一貫して視線を第一評価者に向け、共視を確立し、その共視した視線を固定したまま同意ターンを産出することが観察されたが、非同意のケースでは、第二評価者（非同意産出者）は、第一評価ターンの終結部、または非同意ターンの開始部で視線を逸らすことが観察された。この視線を逸らすという振る舞いは、構築中の行為を投射する資源となっていると考えられる。このように視線の振る舞いというのは、行為タイプに敏感なものであることが示唆される。

<<口頭発表>> (9月13日 10:00-10:30)

【F棟 1F 110 教室】

勧誘会話における日中の配慮の仕方
—被勧誘者が勧誘内容に興味がない場合—

劉丹丹

「勧誘」は日常生活で頻繁に使用される言語行動で、他人との距離を縮めることができる方法の一つであると考えられるが、日中の中で摩擦が起きやすい言語行動であるとも言える。その摩擦が起こる一つの大きな原因は日中の対人の配慮の仕方にあると考えられる。そこで、本稿では「被勧誘者が勧誘内容に興味がない」場合の勧誘会話における勧誘者と被勧誘者の言語行動を分析し、日中の配慮の仕方について考察した。その結果、日中の配慮の仕方に違いが見られた。被勧誘者が勧誘内容に興味がないにも関わらず、日本語の方は、勧誘者が情報提供している間に、被勧誘者が頻繁にあいづちを打つことで、勧誘者のフェイスを侵害しないように配慮を示している。一方、中国語の方は、被勧誘者が自ら勧誘内容に関する情報要求をすることで、勧誘者に配慮をしている。また、勧誘発話の出現位置や勧誘発話に対する被勧誘者の応答からも、日中の配慮の仕方に違いが見られた。

<<口頭発表>> (9月13日 10:35-11:05)

【F棟 1F 110 教室】

日本語とスワヒリ語における「勧誘」の対照研究

—「勧誘の受諾」の会話から—

中垣友江

本発表の目的は、日本語とスワヒリ語における「勧誘」の会話を対照し、それぞれの言語における会話の特徴を示し、共通点と相違点を明らかにすることである。日本語とスワヒリ語において、勧誘者からの「勧誘」を被勧誘者が「受諾」した場合の会話を扱い、会話を4つの部<開始部><勧誘部><相談部><終結部>に分ける。そして発話、言語行動を分析する。使用したデータはロールプレイの手法を用い、日本語母語話者、ケニアのスワヒリ語話者に、同様の場面の会話を行ってもらいそれを文字化し分析対象とした。日本語とスワヒリ語で大きく違ったのは、<勧誘部>または<相談部>において、支払者の決定を行うことである。スワヒリ語では、事前に代金の支払者の決定を行っておくことが「勧誘」の会話においては必要であることが分かった。それはケニアの社会的なルールや状況によるものであると思われる。

<<口頭発表>> (9月13日 11:10-11:40)

【F棟 1F 110 教室】

日韓の同性間の談話における聞き手の発話様態
—ポライトネスの観点からみる日韓差と男女差—
張允娥

本研究は、日韓の聞き手の言語行動に着目し、親しい間柄の同性間の談話で男女が用いるポジティブ・ポライトネス・ストラテジー(以下 PPS)にはどのような類似点と相違点があるかを日韓差と男女差の観点から分析したものである。談話のなかから、先行発話に理解、同意や共感、感情や感想を表現する発話、相手に同調する発話を取り出し、談話上の発話様態の特徴から、[あいづち]、[繰り返し]、[言い換え]、[先取り]、[あいづち+ α]、[その他]に分類して分析を行った。その結果、PPSの使用率は日本が高いが、日本の談話では PPS としての働きかけが比較的弱い[あいづち]の使用割合が高く、韓国の談話では働きかけが比較的強い[あいづち+ α]がより高い割合で用いられていた。また、日韓ともに、男性に比べ、女性の方が PPS の使用率が高く、PPS として比較的働きかけが強い[先取り]は女性同士の談話の特徴であることが分かった。

<<口頭発表>> (9月14日 13:00-13:30)

【F棟 2F 209 教室】

対話におけることわざの使用とその動機づけ

平川裕己

本発表では、対話におけることわざの用法を整理し直し、それらが対話のやりとりに根ざすかたちで発達していることを明らかにすることを目的とする。

対話におけることわざの使用について、Norrick (1985)は評価的論評(evaluative comment)、評価的論拠(evaluative argument)、直接的適用(direct application)の3分類を提案した。しかし、対話においてこれらの用法が生じる理由は明らかではない。

本発表では、まず、Norrick(1985)の3用法を修正し、新たな3分類を提示する。そして、状況を捉えて説得するための道具であることわざを対話のやりとりのなかで使うなら、本発表が提示する3用法が必然的に生じることを明らかにする。

参考文献

Norrick, Neal R. (1985). *How Proverbs Mean: Semantic Studies in English Proverbs*. Berlin; New York; Amsterdam: Mouton Publishers.

<<口頭発表>> (9月14日 13:35-14:05)

【F棟 2F 209 教室】

「味」のレトリック

— 日韓の TV コマーシャルで使用されている「おいしさ」の表現 —

武藤彩加

日本語は他の言語と比べ「サクサク」「プリプリ」などの「テクスチャー（食感）」を表す表現が圧倒的に多く存在することが、従来の研究で指摘されている。辞書に存在するだけでなく、広告をはじめ身の回りにあふれている。

一方、韓国語は日本語以上に「オノマトペ（擬音語・擬態語）が豊富な言語であるとされる。日本語のテクスチャー表現の多くはオノマトペであるが、日本語と同様、韓国語においてもテクスチャー表現が豊富に存在し、実際に使用されているのだろうか。

そこで本発表では、日本語と韓国語における「味を表す表現」について、各々の言語でどのように「おいしさ」が表現されているのかについて考察した。具体的には、日韓の食品に関するテレビコマーシャルに注目し、そこでおいしさを表す際にどのような表現が用いられるのかについてそれぞれの特徴を明らかにした。

<<口頭発表>> (9月14日 14:10-14:40)

【F棟 2F 209 教室】

関西方言話者が共通語形を選択するとき

—認知的な観点から—

ヘファンケビン 平塚雄亮

話者は社会的なコンテキストに応じて方言や共通語といったバリエーションを用いる。しかし、極端に偏っているバリエーションもある。例えば、関西方言話者は、「そやね」という表現を多用する。一方で、「そだね」のような表現はめったに使用しない。本発表では、語形処理の認知モデルを応用し、「や」と「だ」の使用頻度の格差を説明する。

関西方言話者79人の会話における共通語コピュラ「だ」と関西弁コピュラ「や」の使用割合を調べた。その結果、「そう」、またはモダリティ表現のすぐ後に来るコピュラの使用割合は極端に偏っているということを確認した。語形処理の認知モデルによると、共起確率の高い単語同士は一つのまとまりとして処理することが多い。従って、高い頻度で共起する「そう」と「や」はまとまりとして処理されるため、関西方言話者は共通語らしい口調で話しても「や」を「だ」に入れ替える認知的な余裕がないと結論づける。

<<口頭発表>> (9月14日 14:45-15:15)

【F棟 2F 209 教室】

被災地の方言を撮る
—方言研究者による映像アーカイブ—
櫛引祐希子

東日本大震災後、被災地では方言を用いた被災者への支援活動が展開されている。そうした活動の中から被災地における方言の役割を読み解こうとする研究は、方言の社会的機能に関わる研究として意義があるが、そのみならず、現代社会における方言の使用を記録するアーカイブ的な意義もある。

本発表は、そのアーカイブ的な意義に注目し、方言による支援活動を撮影することについて方言研究者としての立場から報告するものである。

従来の方言研究は客観的な記述を重視してきたが、方言研究者が撮影者・編集者になることは、観察者および当事者として社会を見つめるだけでなく、逆に社会から見つめられる存在にもなることである。従来の研究では消滅の危機にある方言のアーカイブとして映像を利用することはあったが、本発表では、そこからさらに一歩すすめて、方言研究者が方言による支援活動を撮影し発信するという行為自体が持つ意味について考えたい。

<<口頭発表>> (9月14日 13:00-13:30)

【F棟 2F 210 教室】

就職活動と英語に対する大学生の意識

—あるケース・スタディから—

森住史

経済のグローバル化が進み社内公用語を英語とする企業もある中で、これからの日本では英語ができないと就職ができないという不安を感じる大学生は多いが、一方で就職を意識して英語学習に特別に力を入れているようにも見えない。なぜ学生たちはアンビバレントな姿勢をとるのか。本研究では学生を対象にしたアンケート調査を中心にしたケース・スタディを試みる。語学学習の強い動機付けとなる *ideal L2 self* (e.g., Dörnyei and Ushioda 2009) を描けないことと、日英のバイリンガルになる *need* (c.f., Grosjean 2010) を欠くことの2点が主な理由であるとの仮説をたて、アンケートやその後のインタビューの内容と照らし合わせた結果、仮説の2つはともに有効であるということと、その原因としては、学生たちがそもそも自身の英語力に合わせた就職を意識していることから、就職のためにわざわざ英語の勉強をする姿勢を持たないことが推測される。

<<口頭発表>> (9月14日 13:35-14:05)

【F棟 2F 210 教室】

方言接触による方言習得と方言レベリング

—メキシコシティ日系コミュニティにおける日本語否定の形態素の変異—

奥村晶子

本発表では、メキシコシティ日系コミュニティの日本語における否定の形態素の変異を取りあげ、方言接触の観点から変異理論の枠組みで分析する。扱うデータはメキシコシティ在住の日系コミュニティメンバーの会話データである。日本語の用言の否定形は、地理的方言から2つに大分できる。1つは東日本を中心に使用される形態素「-ナイ」を伴い、もう1つは西日本を中心に使用される形態素「-ン」を伴う。当該コミュニティではこの2つの異なる表現を使用する話者同士が混在していた。方言接状況に起因したと考えられる以下の2つの現象を発話例と共に取り上げる。

1. 一世移民に見られた自分の母方言とは異なる方言形式の使用
2. 二世移民に見られた方言のレベリング

前者は接触に関する先行研究でも取り上げられる長期間のアコモデーションや方言習得の結果と共通し、後者はレベリングの結果、より無標である「-ナイ」が現在優勢となっていると考えられる。

<<口頭発表>> (9月14日 14:10-14:40)

【F棟 2F 210 教室】

実時間調査による共通語化モデルの検証

—国立国語研究所の鶴岡調査から—

阿部貴人

本発表は、国立国語研究所が1950年から約20年間隔で4回実施した鶴岡調査の結果から、共通語化に関するモデルを検証することを目的とする。国立国語研究所が第2回調査(1971年)後に導出した共通語化のモデル(将来予測を含む)が、第4回調査の結果分析から実証できることをみる。ただし、全36項目中1項目ではこのモデルが適用できなかった。その理由は言語内的要因・言語外的要因の両方の可能性を指摘できる。特に言語外的要因としては共通語そのものの変化が関係しており、今後、この「新共通語」についても同様にモデルが適用できる可能性を指摘する。

<<口頭発表>> (9月14日 14:45-15:15)

【F棟 2F 210 教室】

台湾花蓮県萬榮村におけるランゲージシフト

簡月真

セデック人とタロコ人が住む台湾花蓮県の萬榮村では、**Tgdaya** 方言（セデック語）と **Truku** 方言（タロコ語）との方言接触のほかに、日本語や華語、閩南語などとの言語接触が起きており、その接触構造は重層的である。本発表は、その言語接触によって生じたランゲージシフトのプロセスを明らかにすることを目的とする。

まず、ドメインという分析手法を用いて、萬榮村の多言語使用の現状を把握したうえで、セデック語とタロコ語が優勢言語である華語へシフトしつつあるプロセスをダイナミックに捉えていく。次に、基礎語彙の調査を通して、セデック語とタロコ語がすたれていく様子を明らかにしていく。ドメインによる言語使用調査では、セデック人 20 人とタロコ人 80 人を対象に、言語使用意識を調べた。基礎語彙調査では、セデック人 5 人とタロコ人 10 人を対象に、セデック語とタロコ語の基礎語彙 200 語の使用能力について調べた。

<<口頭発表>> (9月14日 13:00-13:30)

【F棟 1F 109 教室】

類義語としてのカタカナ語・漢語の意味的相違
—「シーズン」と「季節」の意味相違についての考察—
陳暁静

『朝日新聞』2012年のデータを用い、「シーズン」と「季節」の相違について検討し、両語の意味フレームを明らかにした。大きくは、「シーズン」が主に①人間の行動・精神に基づき盛んである時期、②スポーツ、イベントの始末の一つの時間的な区切りという二つの意味で使われている。例えば、「花見シーズン」「今シーズン」のような語である。また、専らの自然現象においては「季節」に近い意味も用いられている。例としては「繁殖シーズン」がある。一方、「季節」においては、①四季との関わりが深く、物理的な気候、②比喩的な意味も使用されている。例えば、「花の季節」と「政治の季節」のような語である。人間の感情によって決められた時期を指すとき、「シーズン」の意味に近い語もある。例えば、「恋の季節」である。以上のように両語が類似している意味もあり、各々の特徴を有する部分もあることを検証した。

<<口頭発表>> (9月14日 13:35-14:05)

【F棟 1F 109 教室】

ジャワ語の敬語の習得をより易しいものへ
—敬語語彙目録の再検討—
スリブディレスタリ

ジャワ語の敬語は日本語と同様、対者敬語と素材敬語の両方のシステムを持っている。つまり、丁寧語および尊敬語・謙譲語にあたる表現が敬語の仕組みの中に備わっているということである。しかし、形態的な手法を持っている日本語と異なって、ジャワ語の敬語は語彙的であり、適切な語彙の取り換えによって敬語が表わされている。話者が数多くの敬語語彙を覚えなければならない。そのため、ジャワ語の学習やジャワ語の研究において敬語語彙の目録が欠かせない。本研究は、先行研究や3つの辞書による敬語語彙の目録を再検討し、新たな目録の作成を試み、ジャワ語の敬語の習得や研究をより易しいものへと繋ぎたい。調査の結果から、本研究は中間的な丁寧さを表す語彙を無くし、さらに従来記述されている敬語の9つのレベルから4つのレベルに簡略すべきと主張する。

<<口頭発表>> (9月14日 14:10-14:40)

【F棟 1F 109 教室】

日本語の翻訳字幕における省略と縮約の実現

—韓国語との対照を通して—

尹盛熙

本発表の目的は、日韓両言語の「翻訳字幕（以下、字幕）」という談話形式を取り上げ、強い時間的・空間的制約の下で具現される談話において、両言語でどのような戦略が取られるかを対照することである。そのため、欧米のTVドラマのDVDで提供される日韓両言語の字幕を観察し、字幕独特の文体が持つ形式面の特性及びその語用論的機能を考察する。その結果から、日本語字幕においては、述語を省いて名詞や名詞句の形で文を締めくくる「助詞止め」「名詞止め」の文末形式が頻繁に用いられること、またその形式が特定ジャンルのコンテンツまたは特定の場面でより多用されることにより、劇的緊張を高める機能を果たしていることを示す。さらにこのような文末形式は、系統の近い言語として多くの類似点を持つとされる韓国語の字幕においてはほとんど見られず、両言語は省略・縮約において異なる戦略を取っていることも併せて主張する。

<<口頭発表>> (9月14日 14:45-15:15)

【F棟 1F 109 教室】

意味機能に基づく日本語フィラーの使用実態
—中国人日本語学習者と日本語母語話者との対照に着目して—
葛欣燕

日本語フィラー研究では、種類、表現形態、機能等について論じたものは多いが、談話管理という視点から中国人日本語学習者と日本語母語話者との差異を分析したものはあまりない。

本稿では、日本滞在期間3～5年の中国人日本語学習者8名と日本語母語話者7名による7組の会話資料を基に、談話調節機能（発話や話題の切り出し・発話権維持・時間稼ぎ・話者交替）と対人調節機能（和らげ・ためらい・共通理解）という2つの観点から、両グループの使用実態を分析・比較した。その結果、学習者は母語話者と同じく「発話や話題の切り出し」、「発話権維持」、「時間稼ぎ」機能のフィラーを多く用いているが、「和らげ」、「ためらい」機能のフィラーの使用率が低いことが明らかになった。

これは、本来中国語にはフィラーが少ないという要因も考えられ、婉曲な表現が好まれる母語話者に対し、学習者はより直接的な表現を選択している傾向があると考えられる。

<<口頭発表>> (9月14日 13:00-13:30)

【F棟 1F 110 教室】

カーレースの実況中継における予想と検証の発話連鎖

劉礫岩 細馬宏通

実況中継において中継者は、ランダムにではなく、誰が、いつ、何をとりあげ、どんなコメントをするかを相互行為的に決めていく。また、しばしば刻一刻に変化する状況に応じて、途中でコメントを変更しなければならない。それがどのような組織化しているのかを明らかにするため、本研究はカーレースの録画データを使って、そのハイライトの1つであるオーバーテイク(追い抜き)場面の実況中継に注目し、分析した。その結果、1. 中継者たちは結果を予測する解説者と、出来事を報告するアナウンサーという役割分担で、2. オーバーテイク場面では、レースの進行にあわせて予想、報告発話を微細に調整し、「予想→検証」の発話連鎖を組織し、3. その連鎖構造は、レースの専門家である解説者と、その素人、あるいはただの報告者であるアナウンサーという成員カテゴリー対を構成するリソースにもなっていることがわかった。

<<口頭発表>> (9月14日 13:35-14:05)

【F棟 1F 110 教室】

敗者へのインタビュー
—スポーツ競技後インタビューの切り出し方—
細田由利 アリンデビッド

近年の会話分析研究では、政治家などに対するニュースインタビューの分析が進んでいる (e.g., Clayman, 2002; Clayman & Heritage, 2002; Heritage & Clayman, 2010)がそれ以外の放送トークの分析はあまり進められていない。

本研究ではスポーツ競技の後、インタビューアーがいかにしてインタビューを行うかを検証する。特にインタビューアーは敗者インタビューをいかにして開始するのか、そしてその開始手続きは勝者インタビューとどう異なるのか、ということに焦点を当てる。この研究で検証されたデータは録画された国内外のフィギュアスケート主要大会の競技後に行われた48の日本語インタビューである。検証の結果、敗者インタビューではインタビューアーの質問を中立的に保つことへの志向が観られた一方、質問の非中立的な前提が表面化してしまう場面も観察された。

<<口頭発表>> (9月14日 14:10-14:40)

【F棟 1F 110 教室】

Co-constructing Argument in Peer Discussion

—Single Episode Analysis of Conflict Talk—

アリンデビッド 細田由利

This study explicates how second language (L2) speakers jointly construct conflict talk sequences. We examine a single episode of dispute occurring during a group discussion in an EFL (English as a foreign language) classroom, with a focus on a specific utterance "I have a question" produced by one of the four discussants.

The analysis of the target utterance and surrounding turns revealed that: (a) the target utterance emerged in a context in which the speaker's previous question opposing the other discussant was not appropriately responded to; (b) the target utterance performed multiple actions, including but not limited to a preliminary to opposition; (c) the recipient of the target utterance displayed trouble producing counter-opposition; but (d) the target utterance nevertheless succeeded in redirecting the point of the discussion. Through the deployment of this target utterance and surrounding talk, these L2 interactants demonstrated their competence in successfully managing the conflict talk.

<<口頭発表>> (9月14日 14:45-15:15)

【F棟 1F 110 教室】

理容行為の実践を巡る様々な発話の組織化

名塩征史

本研究は、職業談話研究の一環として理容行為を取り上げ、理容室における複雑な意図の伝達と共有が、理容師を含む複数の主体間でどのように達成されるのか、またそうした伝達と共有が、概ね定式化された理容行為の展開とどのように関連し組織化されるのか、その様相を分析・記述することを目的とする。

本発表では、ある男性理容師による実際の理容行為を質的・経験的手法によって分析した結果をもとに、理容師による様々な発話を理容室に特有の環境や現行の理容行為との関連から記述・分類する。特に、理容行為と並行するが故に避けることができない身体的な制限や、理容行為に用いられる様々な道具との関連に焦点を当て、理容行為を巡る様々な発話の組織化について一考を加える。